

ウィキペディア

足袋蔵

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

足袋蔵（たびぐら^[1]）とは、埼玉県行田市にある、足袋産業にかかわる蔵造りの建物。古くはおもに足袋の保管庫であった。壁の柱の間隔が狭く、空間に柱がないのが特徴である。江戸時代から1957年（昭和32年）にかけて建築された。土蔵だけでなく、石蔵、煉瓦蔵、木蔵、コンクリート蔵、モルタル蔵など、年代により様々な建築技術による多種多様な蔵が、特定のエリアに固まらず、行田の町に点在している。2017年（平成29年）に「和装文化の足元を支え続ける足袋蔵のまち行田」として日本遺産に認定された^{[2][3]}。



旧小川忠次郎商店（忠次郎蔵）

目次

特徴

歴史

構造

保存と利活用

- NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク

- 足袋蔵の再生・活用事例

- その他の足袋蔵の活用事例

足袋蔵の評価

主な足袋蔵

アクセス

- 自動車

- 電車

脚注

参考文献

関連項目

外部リンク

特徴

一般に蔵は豊かさの象徴として表通りに面して建造されることが多いのに対し、行田の足袋蔵は敷地の裏庭に建造されているところに特徴がある^[4]。これは、石田三成の水攻めに耐えた忍城の城下町であった行田では、江戸時代、城と城下町の整備が行われ、商店は表通りに面した幅に応じて課税されたため、通りに面する幅を狭く取り、奥に細長く敷地をとる商店が多い街並みが形成されたことに由来する^[4]。

この細長い土地の表から順に店舗や住宅が築かれ、中庭に足袋工場を建設し、裏庭に足袋蔵は築かれた^[4]。北風に備えて北西方向のみを塗り壁にしたり、北西方向の窓を極端に少なくしたりといった防火・防寒対策を施した「半蔵づくり」の店舗や住宅に続いて、接客のための中庭、工場、足袋蔵、火除けを願う屋敷稲荷が、表通りから列をなして並ぶのは、行田の足袋商店特有の配置である^[5]。屋敷稲荷は、1846年（弘化3年）2月2日の記録的大火となった「伝兵衛火事」の際に、天満稲荷神社から南側へは延焼しなかったため、お稲荷様の御利益であるとして各家で屋敷に稲荷を祀るようにとお触れが出された江戸時代の名残である^[6]。

建造された年代により、様々な建材が用いられ、外観に共通項のない多様なつくりの蔵が約80棟現存している^[5]。

歴史

綿花や藍の栽培に適する地理的な条件が整っていた行田の農家では、江戸時代、藍で染色した糸で織る青縞織や白木綿を副業として製織しており、行田足袋は、こうした地産の青縞織や白木綿を原材料として江戸時代の中頃から作られていた^[7]。1716年～1736年の享保年間の「行田町絵図」に3軒の足袋屋が記されていることから、この頃までには足袋作りが始まっていたと考えられている^{[3][8]}。



行田足袋

当初は中山道の要衝にあった近隣の熊谷宿での需要に始まり、明治時代には庶民が日常から足袋を履くようになったことで、需要が増え、行田の足袋産業は大きく発展した^[9]。足袋生産は行田近郊の農家が現金収入を得る代表的な内職であり、主に婦女子の内職であった。明治時代には忍藩が廃止されたことにより、仕事を失った元藩士が足袋屋をはじめる例もあった^[10]。

1875年（明治8年）には20万2,350足を生産した^[11]。足袋生産に関わる者が増え、生産量が増えるにつれ、各々の足袋屋が独自に販路を開拓し、やがて、東北地方や北海道などにも足袋を売りに行くようになった^[12]。

当時の人々はおもに防寒として足袋を履いたため、足袋の需要は冬場に多く、10月頃に出荷が集中するため、それまでに作り溜めした足袋を保管しておくための「足袋蔵」が必要となり、多数建造された^[13]。足袋蔵は江戸時代末頃には建築されていたことが文献により知られているが、現存する足袋蔵では、18世紀後半に忍城城下町の行田で呉服商を営みはじめた「大澤久右衛門」家の土蔵が最古である^[14]。正確な建築年代は不明であ